

明治元辰年
五月十五日
東大争
名戦圖

**Interfaculty
Initiative in
Information
Studies**

東京大学大学院情報学環 学際情報学府

学
環
学
府

GAKK

KANN

GAKU

FU

2007年・冬
福武ホール着工
記念特集号

Graduate School of The University of Tokyo
Number **16**

TOPICS

福武ホール 安全祈願祭・着工記念パーティー開催



福武会長ご夫妻

11月24日午前11時より、鹿島建設主催による情報学環・福武ホール安全祈願祭が執り行われた。東京大学側からは、西尾副学長、吉見学環長らが出席した。寄附者である福武総一郎氏、設計者である安藤忠雄特別栄誉教授も出席され、鍬入れを行われた。

また、安全祈願祭終了後、東京大学主催による情報学環・福武ホール着工記念パーティが、レストラン カポ・ペリカーノにおいて開催された。安全祈願祭に参加したメンバーに加え、総長名代として岡村副学長も参加され、立食形式で和やかな歓談が行われた。



挨拶する福武総一郎氏



安藤忠雄 特別栄誉教授

古代へのタイムスリップ

池内研「バーチャル飛鳥京」の世界

池内研究室は、博士2年の角田哲也君、学府OBで特任助手の大石岳史君、修士1年の鎌倉真音さんを中心に、11月3～5日、奈良県明日香村で「バーチャル飛鳥京」の一般公開を行った。

本プロジェクトはCG技術を用いて、明日香村の遺跡を復元することを目的としている。観光客は小型カメラの付いた特殊なゴーグルをのぞき込むことによって、現在の明日香村の背景映像の上に、CGで復元された当時の景観を重ねた映像を鑑賞することが出来るいわゆる複合現実感システムとなっている。明日香村は古都保存法の適用地域であり、レプリカによる文化財の復元や展示用施設の建設は難しい。また、明日香村の建物配置にはいまだ諸説が存在し、簡便なモデルの差し替えが必要とされる。そこで池内研究室では複合現実感技術を用いて村内の諸遺跡を復元する「まるごと博物館」計画を明日香村に提案し、イベント開催にいたったものである。

今年度は、昨年度開発した川原寺のコンテンツに加え、麓に蘇我入鹿邸のあったと伝えられる甘樫丘から見下ろす7世紀の飛鳥京の復元を行った。また昨年度のアンケート調査結果をふまえ、古代の人物や鳥瞰視点の追加を行った。甘樫丘・川原寺2会場合わせて3日間で900名以上の来場があり、甘樫丘では最大1時間待ちの行列ができるほどの人気で、観光客らが古代へのタイムスリップを楽しんだ。

池内研究室では、これまで実光源環境に対応した仮想物体の陰影を加えることにより、複合現実感画像の写実感を向上させる研究に取り組んできた。学府1期生の佐藤いまりさんの博士論文では、基礎画像

という概念を利用し、実光源環境に対応した陰影を加えることにより、現実感を向上させることに成功した。ただし、画像ベースのため視点の変更が行えなかった。今回の角田哲也君の研究では、大石岳史助手の指導の下に、新たに影付け平面という概念を提案し、視点の移動を可能にした。さらに、合成処理にグラフィクスカードを用いることができるようにアルゴリズムを改良し、実時間処理が可能となった。遠景のCGを見るためのズーム機能や、前景の木立にかかるCGを透過させるためのマスク処理などといった改良も加え、より現実性の高いシステムとなっている。



将来は装置を小型化し、レンタサイクルなどに積めるようにし、明日香村の至る所でゴーグルをのぞき込めば古代の景観を体験できるような「まるごと博物館」を作りたいと考えている。なお、本研究の基本ソフトウェアは、文部科学省のプロジェクトにより開発したものであり、イベント開催は、国土交通省の資金を受けて行った。「バーチャル飛鳥京」のホームページは以下にある。

<http://www.cvl.iis.u-tokyo.ac.jp/~kakuta/virtual-asukakyo/>

NEWS

2006年

学環・学府ホームカミングディ

第5回東京大学ホームカミングディが11月11日(土)に開催され、学内外から多くの参加者を集めました。その催しの一環として、大学院情報学環・学際情報学府でも、2006年学環・学府ホームカミングディと題した独自の催しを開催しました。

今年は、吉見学環長から「学環3.0: 百学連環の未来へ」というタイトルで情報学環の現状と課題、そして将来ビジョンの報告があり、続いて学環長と3人のOB/OGの皆様(可 越さん/2期生:日中映像コミュニケーション取締役、佐藤由紀さん/1期生:佐々木研D3、吉海智晃さん/1期生:情報学環助手)に登壇していただき、情報学環の思い出や今後期待すること、特に、あなたが学環長だったらどういったアクションプランを実行するか? というテーマでディスカッションして頂きました。

その後、場所を移して恒例となった「学環・学府めぐり」(教員、院生の共同による研究室、プロジェクト紹介)も開催され、夕刻からは懇親会で親睦を深めました。今回は、生憎の悪天候ということもあり、来訪者の数は少なかったのですが、学環のこれからの展望を俯瞰、またOB/OGの皆様のご活躍を垣間見ることができ、また現在の情報学環における研究プロジェクトを学内外に紹介できたという点では内容的に非常に充実したものになりました。

企画広報委員会では、ご協力いただいた教職員・事務の方々へ感謝すると共に、来年はより広く参加者を募り、また入退説明なども併催することにより、より多くの方々に情報学環・学際情報学府を知っていただく機会になればと願っています。(助教:中尾彰宏)



「3次元映像シンポジウム」開催

去る11月21日(火)、東京大学数理解科学研究所大講堂において、「3次元映像シンポジウム」が、東京大学情報学環の共催により開催されました。

尾上守夫東京大学名誉教授の挨拶から始まり、総務省と情報通信研究機構の基調講演のほか、9件の講演がありました。尾上守夫東京大学名誉教授のご講演はもとより、東京大学情報学環の坂村教授、河口教授、池内教授や東京大学情報理工学系研究科の館教授のほか、早稲田大学、電気通信大学、石川光学造形研究所や凸版印刷の研究者を招き、近年科学技術の発展に伴

って需要が増加している3次元映像技術の社会における役割や今後の取り組みおよび最新技術の紹介、特に、デジタルアーカイブやコンピュータグラフィクス、コピキタス情報テクノジーについて発表がありました。

100名を超える参加者からは、その高いレベルの発表内容に強い関心をいただき、シンポジウムは盛況のうちに幕を閉じました。(http://www.hi.is.uec.ac.jp/3Dforum/)(特任助手・宮崎大輔)

学生制作展[iii Exhibition 6] 開催



12月8日から13日にかけて制作展【iii Exhibition 6】が開催された。制作展は、芸術と科学技術の融合によって生まれる新しい表現を学生自らの手で発信していくことを目的とし、学際情報学府と情報学環コンテンツ創造科学産学連携教育プログラムの合併授業の一環として年に2回行われている。6回目となる今回は土日を含んで行われ、広報を含めより対外的にアピールを行い、学内外から500名を超える多くの来場者を迎えた。

今回の制作展ではインタラクティブ性の高い作品が多く出展され、3会場を使用したことによる広い空間や2階中庭オープンスペースの開放感を生かした、大規模な作品展示も行われた。展示室には、これまで学生が築き上げてきた制作展の歩みを知ることが出来る「アーカイブコーナー」が併設され、教育・実践の場としての制作展の意義を垣間見ることが出来た。次回は7月中旬を予定。詳細は制作展HPにて(http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/i3e6/)(荒川研M1・白谷栄梨子)

「ゲーム産業戦略～ゲーム産業の発展と未来像～」記者説明会

8月29日、日本のゲーム産業の国際競争力強化のために産学官が連携して進めてきた報告書「ゲーム産業戦略～ゲーム産業の発展と未来像～」に関する記者説明会が、東京大学工学部2号館93B教室にて開催された。説明会にはスクウェア・エニックス代表取締役社長の和田洋一氏、経済産業省文化情報関連産業課課長の小糸正樹氏、本学の馬場章教授が出席して、ゲームクリエイターの国家的な表彰制度の創設や産学連携の人材育成促進など、今後5年間を視野に入れたゲームの未来像とその実現に向けた産学官それぞれの取り組みが説明された。

当日は全国紙やテレビ局をはじめとするマスコミが多数来場し、本戦略に対する注目の高さを感じさせた。日本でははじめてのこの産官学一体の取り組みを通じて、日本のゲーム産業がさらなる発展を遂げていくことが期待される。(研究員・七邊信重)

CREST「オンラインゲームの教育目的利用のための研究」共同記者発表

8月29日、東京大学、詫間電波高専、(株)コーエーによる、CREST「オンラインゲームの教育目的利用のための研究」共同記者発表が、東京大学工学部2号館93B教室で開催された。この記者発表は、「デジタルメディア作品の制作を支援する基盤技術」(研究総括:原島博教授)の研究チーム「オンラインゲームの制作支援と評価」の研究グループ「オンラインゲームの教育目的利用のための研究」(研究代表:馬場章教授)の中間報告会である。

当日は、詫間電波高専と(株)コーエーの協力を得て開始された、市販の歴史オンラインゲームの教育効果を測定する実証実験と、その実験から明らかになったオンラインゲームを学校教育の現場で活用していくための方法について、本学の馬場教授や(株)コーエーの松原健二執行役員らから中間報告が行われた。会場には多数のマスコミ関係者が来場し、活発な質疑応答が行われた。(研究員・七邊信重)

恒例 東大・ソウル大 合同シンポ報告

恒例の東京大学大学院情報学環・ソウル大校言論情報学科との合同シンポジウムが、10月12日から13日の日程で開催された。東大、ソウル大で交互に開催を担当しており、今回は、ソウル大学のキャンパス内(ヒガン記念ホール)で開催された。東大側からは、吉見俊哉学環長、林香里助教授、安富歩助教授、北田暁大助教授、および13名の大学院生が参加した。

初日(12日)は報告の発表、討論を中

心としたシンポジウムが開かれた。報告者は、リ・スンオン、北田暁大(第一セッション)、リ・セヒョン、安富 歩(第二セッション)の四氏。バック・スンガン、林香里、カン・ミョング、吉見俊哉の四氏が報告を受けてコメントし、深度のある討論を行った。二日目は、日韓双方の学生の発表報告および討論を行った。発表者数が多く時間的なゆとりがない状況ではあったが、言語の壁を越えて熱い議論が交わされた。14日の午前には、現在(06年度冬学期)開講されている日韓共同ビデオ授業の打ち合わせが行われた。

総じて、密度の濃い国際交流を実現することができたといえる。来年度の開催校は東大である。これまでに培った知的友情をよりゆるぎないものとしていく努力を今後とも継続したい。(助教:北田暁大)

「先生と事務職員の夕べ」開催

先生方の知的且つユニークなお話を事務職員向けにさせていただく会が、9月27日開かれた。今回は山内祐平助教授をお迎えして、寄附講座(BEAT)の開設から福武ホール建設へのお話をいただいた。以前に職員向けに「顔」についての講話をしてくださり、今回の企画のコーディネイトもお願いした原島博教授(顔学会会長)にも同席いただき、秋の夜のひと時を楽しみ過ごした。先生の人柄はもちろん、学環のことをさらに知るよい機会となった。

受賞報告

当学環助手関谷直也が、平成17年度に(財)吉田秀雄記念事業財団から助成を受けておこなった研究「『環境広告と社会心理』に関する総合的研究—環境広告の変遷、表現手法、社会心理との関係性についての実証的研究」で、第四回吉田秀雄賞(常勤研究者の部)第一席を受賞した。電通四代社長吉田秀雄の命日の11月9日に、東京汐留のADMT(アド・ミュージアム東京)において、受賞式および同人の受賞記念講演が行われた。

人事異動

採用		
10/1	HAY WESLEY DEAN CHARLES	特任講師
10/16	立花 隆	特任教授
10/16	小林 真輔	特任助教授
10/16	竹之内 禎	特任講師
10/16	清原 聖子	特任助手
11/1	辻本 篤	助手
11/1	荒木 淳子	助手
11/1	大東 誠	助手
11/1	原田 隆宏	助手
11/1	米倉 将吾	特任助手
12/1	杉原 周治	助手
配置換		
11/1	石川 徹	助教(空間情報科学センターから)
任期満了		
10/31	玄 武岩	助手
辞職		
11/30	伊藤 憲二	特任講師

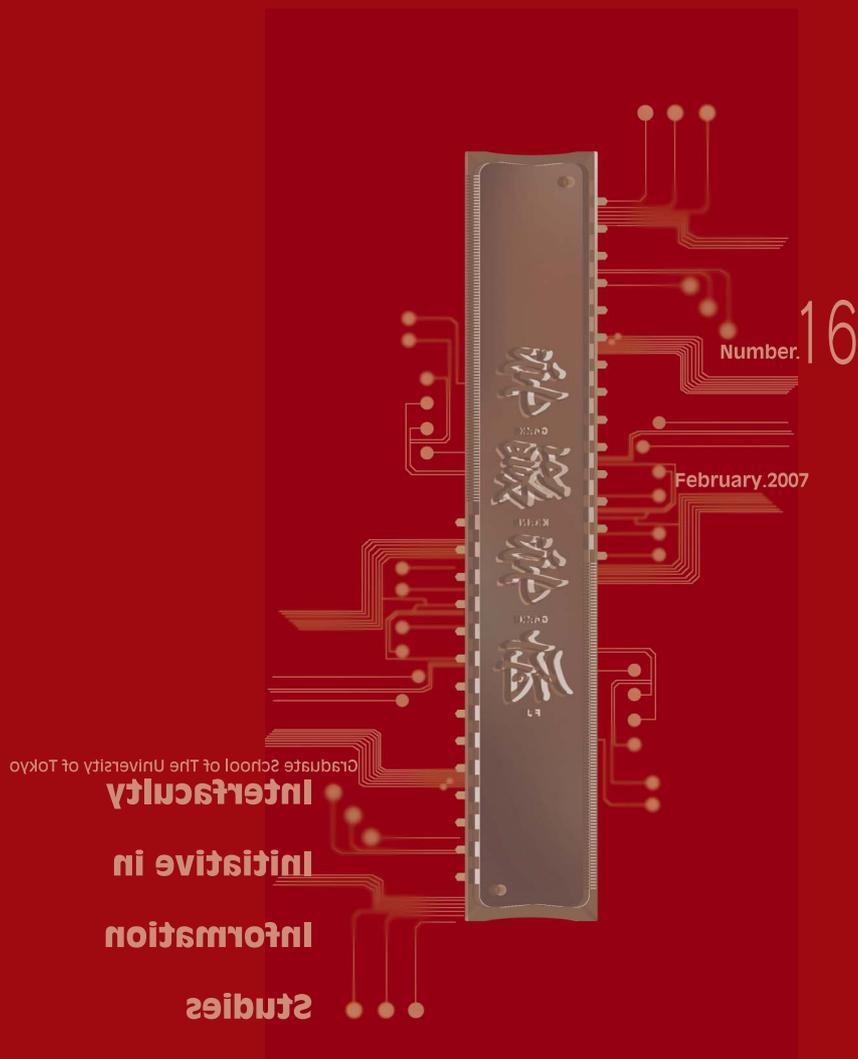
表紙画像

大学院情報学環所蔵の第一次世界大戦期プロバガンダ・ポスター、かわら版、錦絵をCG加工。今号では下の作品を使用しました。ポスター等コレクションの一部は情報学環のWEB(http://www.iii.u-tokyo.ac.jp)でも閲覧できます。

原典
東名大戦争の図(1)

小野秀雄コレクション
錦絵(3)
その他77





東京大学大学院情報学環・学際情報学府

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

発行:2007年2月 編集委員:佐々木正人・林香里・吉海智晃・前波奈保子 特別号協力:山内祐平

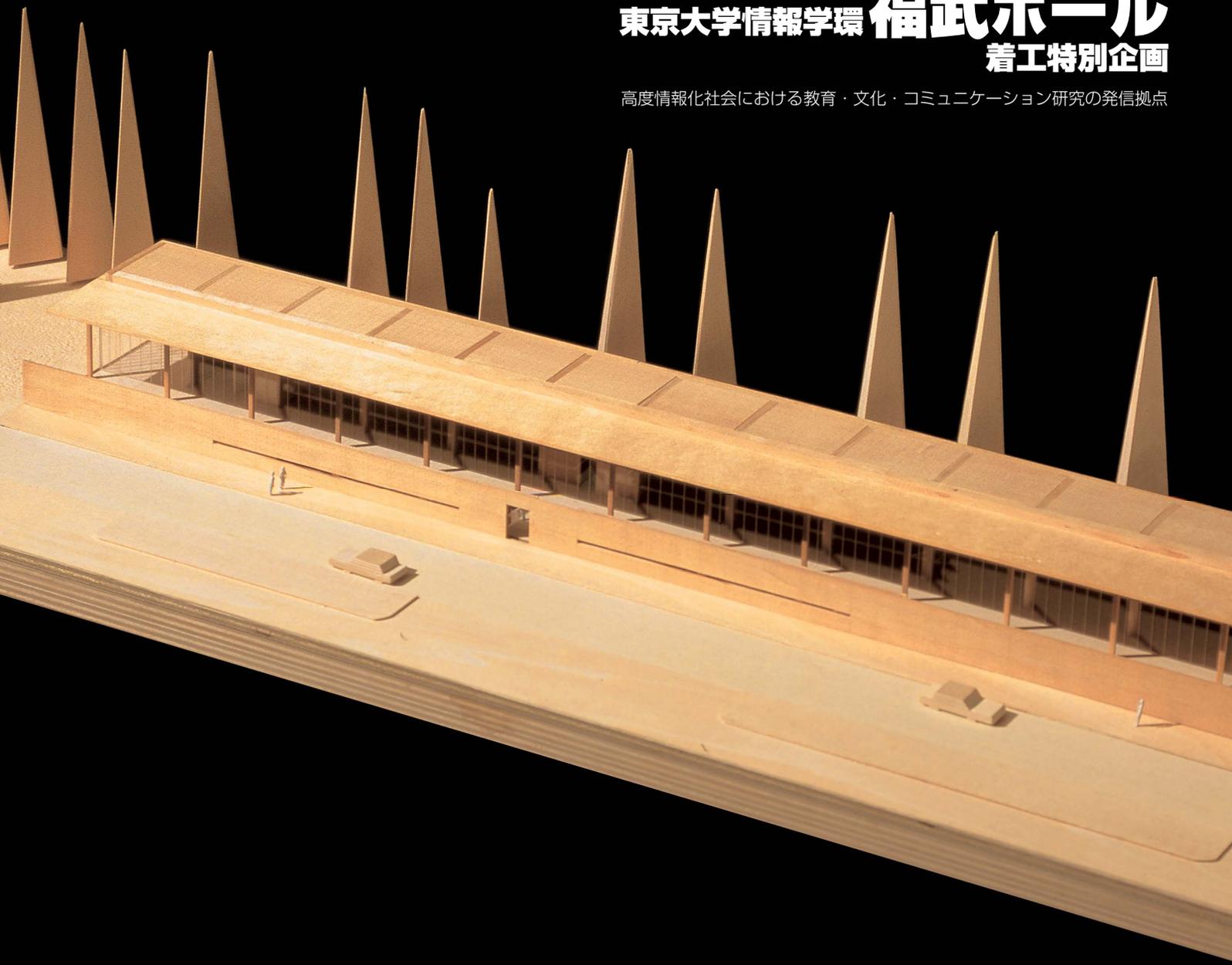
e-mail:news@iii.u-tokyo.ac.jp URL:http://www.iii.u-tokyo.ac.jp

Fukutake ICall

INTERFACULTY INITIATIVE IN INFORMATION STUDIES
THE UNIVERSITY OF TOKYO

東京大学情報学環 **福武ホール**
着工特別企画

高度情報化社会における教育・文化・コミュニケーション研究の発信拠点



世界とつながる 学環を

東京大学創立130周年記念「情報学環・福武ホール」着工記念

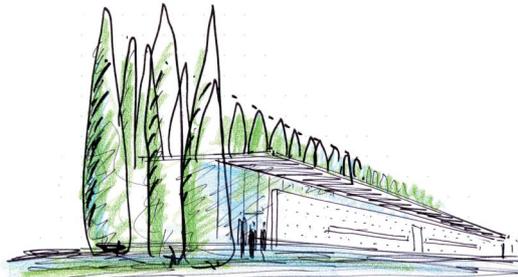
福武会長 × 吉見学環長 対談



ベネッセコーポレーション代表取締役会長
福武總一郎氏



東京大学 大学院情報学環 学環長
吉見俊哉氏



INTERFACULTY INITIATIVE IN INFORMATION STUDIES

FUKUTAKE HALL
THE UNIVERSITY OF TOKYO

設計者 安藤忠雄氏の言葉

東京大学創立130周年を記念して企画された、200人収容のホールを含む校舎施設の計画である。敷地はキャンパス西側、赤門から本郷通り沿いに延びる緑地帯に位置する。奥行き15メートル、長さ100メートルの細長い敷地形状で、本郷通り側には樹齢100年以上、高さ30メートル余りの見事な楠の鬱蒼とした緑があり、キャンパス内外を緩やかに隔っている。

ここでは敷地の緩衝地帯としての性格を継承すること、並びに線形の敷地形状を活かした新たなパブリック・スペースをつくりだすことを目標とした。現在の計画では、既存の樹木を避けて得られるギリギリのスペースを地下2階分掘り下げ、その半分以上を必要な機能を収めたヴォリュームとし、もう半分を階段状のオープン・スペースとする構成にしている。

楠の緑の景観を遮らない高さまでに抑えた結果生まれた地上部分のファサードについては同様に長い間口を持つ京都の三十三間堂を参照し、全体のプロポーションを決定した。キャンパス内ストリートとの境界には、建物と並行してコンクリートの壁を立てている。これは結界としてではなく、壁背後に広がる地下空間と、既存の大学空間をつなぐ「間」の創出を意図したものだ。

キャンパス内に空白の場を創りだす、この「考える壁」の向こうで、学生たちの活発な知的活動が展開する風景を期待して計画に臨んでいる。



現在、東大本郷キャンパスの赤門の隣に、福武總一郎氏（ベネッセコーポレーション代表取締役会長）による16億5千万円の寄付に基づき、「情報学環・福武ホール」が建設中です。竣工予定は、2008年2月。このたび、福武会長と吉見学環長の対談が実現しました。二人で「福武ホール」に込める熱い思いを語っていただきました。

■福武 まず、僕は、情報学環が、学際的だということに注目しています。直島^{*1}と越後妻有^{*2}でアート関係のプロジェクトをやっているのですが、これは、日本の原風景の空間と最先端のアートとをぶつけることによって新しいものを生み出そうという斬新な試みです。私どもの本社は今も岡山で、今後も東京に移すつもりはありません。地方にいて思うのは、東京にあるものが刺激、興奮、緊張、競争、娯楽、情報だけで、人間というキーワードがないんですね。ですからそういった場所からいろんなものを発信しても、だめ。僕はいかに人間が幸せに生きるかというのがすべての学環のテーマだと思っているんだけど、今の研究は、研究そのものが目的化している。しかし、その点、学際性のある情報学環というところには、いろいろな違う価値観が集まっていて、そこで本当は何が正しいんだという問いを発しながら研究が進められていく可能性があると思う。

■吉見 情報学環は、組織が横につながって繁殖していくイメージを描いていて、自分たちのことを「熱帯雨林型」と言ってきました。熱帯雨林というのはどこからどこまでどうつながっているのか、木と木がくっついていて、しかも横にどんどんつながってジャングルになっている。まさに、この「つながり」と言うこと、これが力を持つんだということを私は学環長として実感しております。社会と大学、学環の中での文系と理系、教員と学生、ここではすべてのつながり方が大変にユニークな組織です。東京型って、縦型に効率性を求めるような社会ですけれども、学環は横型としてのつながりを大切にしている。私たちは、このような熱帯雨林が繁殖できる島をいただいたような気がしています。

■福武 つなぐという面ではね、テレビ会議施設などを使って世界中の研究機関とつないでもらいたいね。やっぱり東京大学は世界の東京大学を目指してもらいたい。だから、情報学環のホールにすれば、他の学部の人たちも世界とつながるような最先端としての情報学環を目指してもらい



たいんです。

■吉見 私は、福武ホールは、将来、東大の中で安田講堂と並ぶシンボルになると思うんですよ。

■福武 (笑)それは皆さん方次第。

■吉見 (笑)われわれはそうにしたいと思っているんです。ただ、安田講堂と非常に違う意味になるんじゃないか、そしてしたいなと思っているのは、安田講堂は塔ですから、上に登っていくという思想がある。逆に、情報学環の福武ホールは、半分は地下にもぐっていて、そこで根をはって、直島や越後妻有と根っこでつながり、そこから「チ」が流れていくんです。「チ」は知るの「知」と「血」の「チ」と両方あっていいと思うんですけど、「チ」が流れていくような仕組みが作ることができれば非常にいいなと思っています。

■福武 ありがとうございます。

■吉見 福武ホールは、教員だけでなく、学生はもちろん、地域の人たちももっと元気になるような施設にしたいと思います。会長は以前に、「経済は文化のしもべだ」という素晴らしい言葉をおっしゃっておられましたが、お年寄りなど地域の人が元気になる社会というのは、やっぱり効率至上主義で多様性のない社会であるという証左ですよ。先ほど会長が世界ということもおっしゃられましたが、いま、我々もささやかですけども、韓国を初め海外の大学と一緒にテレビ会議システムでつないで授業をやっております。今回福武ホールをいただいたことによって、もっともっといろんな地域をつないで集まる仕組みができればいいなというふうに思います。

■福武 それは本当にお願したい。あと、情報学環では、中央集権と官僚統制に縛られている人たちを、もっともっと主体化してもらいたい。情報学環には、こういう大きな目標



を持ってもらいたいですね。僕は一個人としてそういうコンセプトも先導したかった。これは、国や官僚じゃできない。

■吉見 ありがとうございます。東大解体ってあるじゃないですか。それ、私、半分ぐらいわかるとい

うか(笑)、でも、東大解体してくれても半分くらいで、と思っているんです。非常に旧態依然とした秩序もございしますが、非常にすぐれた教員や学生、すばらしい資料や宝がいっぱいこの空間にはあるんです。単純に壊してしまっはもったいない。



■福武 壊したらだめ。破壊するとゼロになっちゃう。だから個々の持っている個性なり特色を一緒にして何か新しい次の価値をつくる。そういう意味で、僕は情報学環ができたと思うんですね。今まで、日本はあるものを壊さないものを作ってきた。僕はやっぱり日本を再生する文明史観は、「あるものを生かして、ないものを創る」という方向へ返さないといけないと思う。その考え方を東京では情報学環がやる。大いに期待しているね。

■吉見 ありがとうございます。まさしくその発信の窓を福武ホールという形で作っていただいたというふうに思っております。

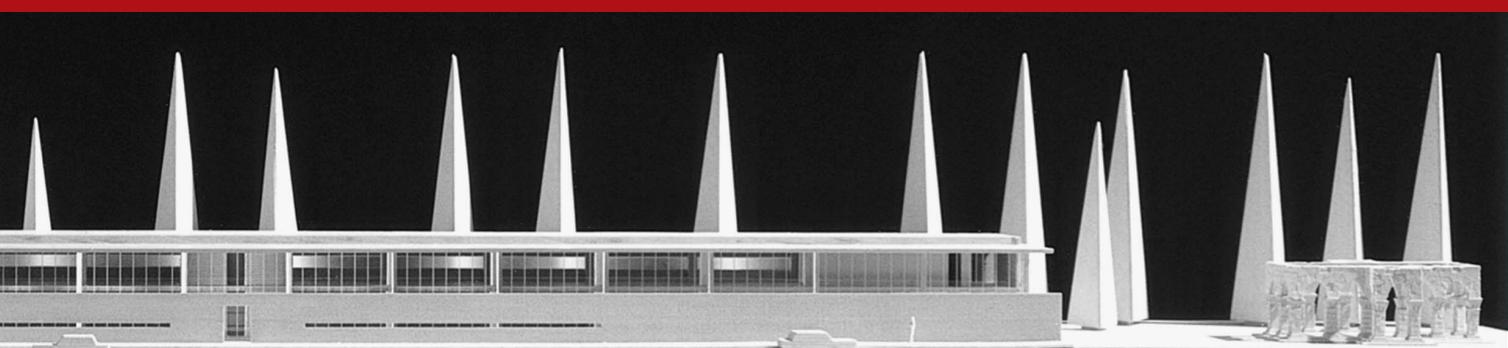
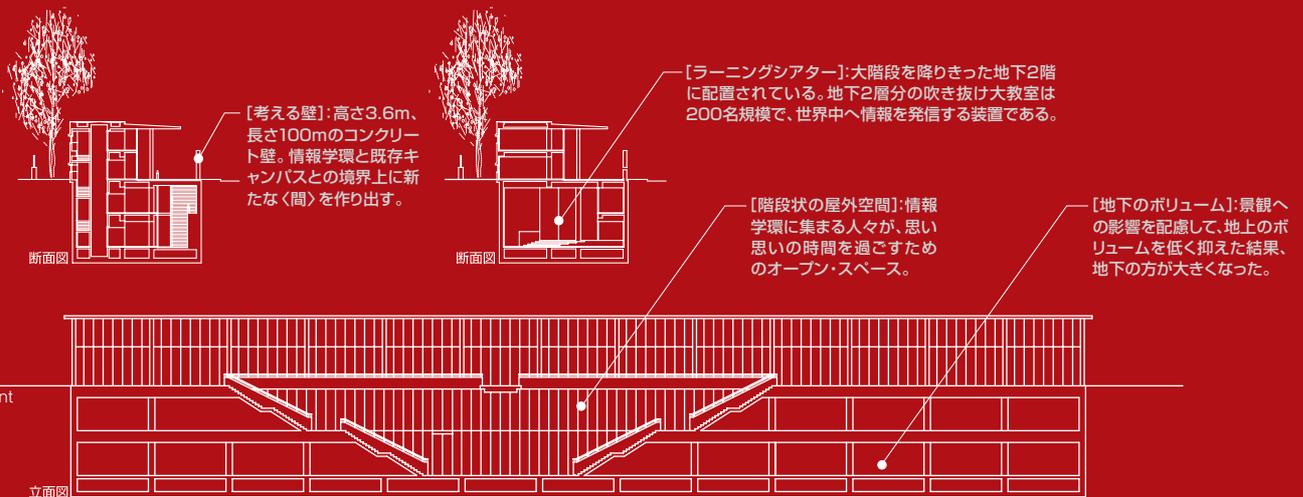
■福武 それだったら大満足ですよ。

■吉見 きょうはお忙しいところ、ありがとうございました。

学環にとってひとつのエポック・メイキングとなる「情報学環・福武ホール」。この大きなプレゼントを贈ってくださるご本人との対談を前に、学環長も少し緊張気味。けれども、実際にお目にかかった福武会長は、始終にこやかに気さくに学環に対する思いを語ってくださり、和やかな雰囲気話が弾みました。予定時間を延長して対談を終えると、会長はさっそうとご自分で車を運転してキャンパスをあとにされました。学問と芸術を愛し、スポーツマンで行動派の会長とお見受けしました。

(2006年11月24日、情報学環暫定建物にて。編集 林香里)

※1 福武総一郎氏が1987年に瀬戸内海に浮かぶ小島、直島の一帯の土地を購入。古民家と現代アートを融合させる「直島・家プロジェクト」や安藤忠雄氏設計の地中美術館などがあり、島全体が大総合アートプロジェクトとなっている。
※2 3年に一度、新潟県十日町市、津南町を舞台にアートの祭典「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」が開催され、世界各国から集まるアーティストや地域の人が作品を制作・設置される。今年も学環博士課程の学生の作品も公募で選出され、出展した。





「創造」「対話」「発信」の空間

情報学環・福武ホール施設の設備

地上2階、地下2階のユニークな設計

情報学環・福武ホールは、研究活動によって新しい情報知を生み出し、教員や学生のコミュニティで育み、プロジェクトを通じて社会に送り出す場としてデザインされている。ここでは、各フロアの特徴的な部分を取りあげながら、情報学環の新しい拠点となる福武ホールの機能について紹介していきたい。

情報学環・福武ホールは、地上2F、地下2F延べ床面積4047.29㎡の建物である。この建物は、以下のようなフロア構成になっている。

- ◆地上2F：教員研究室、資料室
- ◆地上1F：学環コモンズ、カフェ・ベルトレ
- ◆地下1F：全学共用スペース
- ◆地下2F：福武ラーニングシアター、福武ラーニングスタジオ

研究室で生まれた情報知の種が、学環コモンズにおいて育てられ、福武ラーニングシアターや福武ラーニングスタジオを通じて社会に送り出されることを想定して、フロア構成が決められている。

また、地下1Fの全学共用スペースは、史料編纂所と情報基盤センターが利用することになっている。史料編纂所は研究

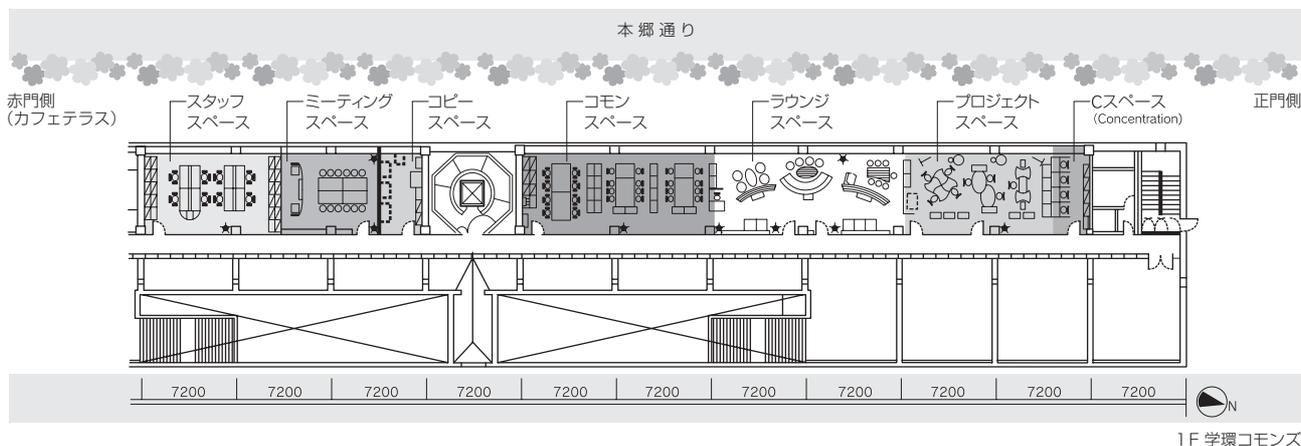
室として、情報基盤センターは電子教材掛の事務室および東京大学の全ての学生が利用可能な端末室として利用する予定である。

学環コモンズ

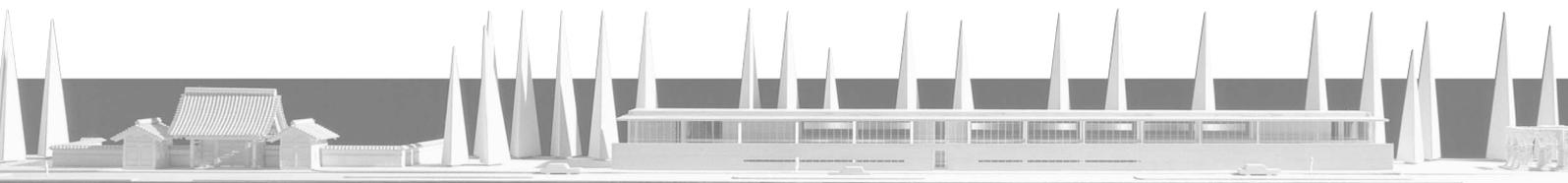
学環コモンズは、情報学環・学際情報学府に関わる全構成員の共有スペースである。

エレベータホールを挟んで左側に、助手や研究員が利用するスタッフスペース、駒場キャンパスとの遠隔会議ができるミーティングスペース、コピーや冊子制作などを行うコピースペースが配置してある。正門よりのスペースは、50mにわたって室内壁がないオープンスペースとして構成されており、家具によってゾーニングされている。中央にはラウンジスペースがあり、ネット接続ができる来客用ソファや、書籍や研究成果の展示棚、軽い打ち合わせができるカフェテーブルなどがおかれている。

赤門よりにあるコモンズスペースには、教員や学生が自由に利用できるフリーアドレステーブルが用意されており、授業や会議の空き時間に自由に利用することができる。このフロアに設置される情報端末（シンククライアント）およびロッカーは、ICカード職員証・学生証で認証できるようにする予定である。



1F 学環コモンズ

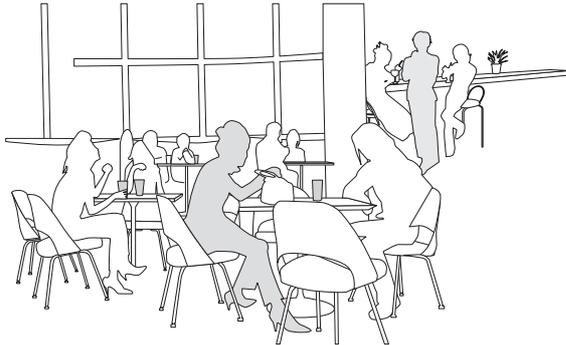


正門側には、プロジェクトスペースとCスペースが設けられている。プロジェクトスペースは、研究プロジェクトの打ち合わせや制作作業などに利用できるよう、折りたたみ・移動が可能な様々な形の机を組み合わせて自由にレイアウトを変更できるようになっている。

C(Concentration)スペースは、集中した作業ができるボックス型の個室で、プライバシーを確保しながら、論文執筆やプログラミングなどができる環境である。

(学環 commons の家具は、コクヨファニチャーからの寄附であり、フロアのデザインも共同で行われている。)

カフェ・ベルトレ



もっとも赤門よりのスペースでは、青山に本店があるフレンチカフェ・ベルトレが営業する予定である。この場所にカフェを設けることには、次のような意味がある。

・赤門すぐの憩いの場

情報学環・福武ホールは、赤門を入れてすぐ左手の場所に建設される。このエリアは、隣接するコミュニケーションセンターとともに東大の顔になる場所であり、土日にはたくさんの観光客が訪れている。ここにカフェを設けることにより、東大への訪問者に対して憩いの場を提供することができる。

・カフェイベントの実施

カフェは、スターバックスのようなテイクアウト型の店舗として営業される。カフェの店内や屋外のスペース(地下に向かう階段や1Fオープンスペース)を利用して、メディアカフェやサイエンスカフェなどのイベントを企画することができる。

・パーティへの料理提供

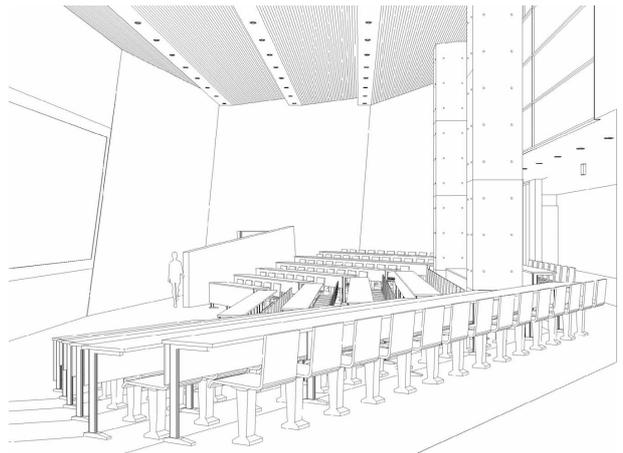
地下2Fのホワイエは、パーティスペースとしても使えるように設計されており、料理の素材を青山店から持ち込み、暖めた上で提供することが可能になる。カフェのオーナーは料理の鉄人に出演した経歴を持つフレンチシェフ・柳館功氏であり、国際会議後のパーティなどに高いクオリティの料理を出すことができる。

福武ラーニングシアター

地下2Fに設置される福武ラーニングシアターは、定員180名(後部の扉を開くことにより、最大200名)の多目的ホールである。国際遠隔授業、研究会、講演会、国際会議などに利用されることを想定している。

ラーニングシアターという名前は、劇場のように「語り」を共有することによって、人々が学ぶ場というコンセプトからつけられている。

国際遠隔授業のための様々な設備(カメラ3台と制御室、テーブルへのマイク埋め込みなど)が用意されており、同様のホールを持つMITなどの海外の大学との国際遠隔授業や国際遠隔会議が可能にな



っている。(基本的な映像音響設備は、松下電器産業から寄附されている。)

また、インタラクティブな講義や講演を支援するために、PRS(Personal Response System)が利用できるようになっている。質問に対して数字キーで答えると、リアルタイムに集計され、グラフの形で表示することができる。

福武ラーニングスタジオ

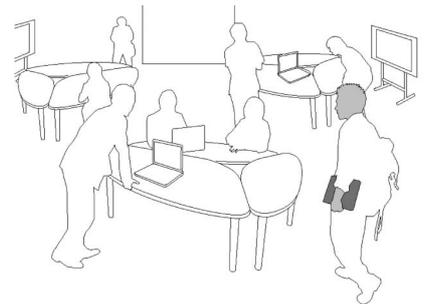
福武ラーニングスタジオは、7m×7mの多目的スタジオである。制作や討論を中心とした授業やワークショップ、研究会などに幅広く利用できるスペースである。

定員16名のスタジオが3部屋設置されるが、パーティションを開くことにより、定員48名の大スタジオとしても利用することができる。ラーニングスタジオという名前は、工房のように「手を動かして」制作することによって、人々が学ぶ場というコンセプトからつけられている。

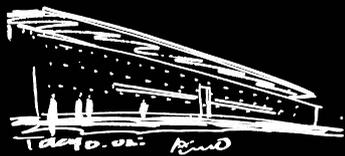
スタジオの奥の壁は全面ガラスボードになり、プロジェクターの投影面とホワイトボードを兼ねている。スタジオの家具は、グループでの討論や作業を想定して、可動式でレイアウトが自由に組み替えられるものになっている。(家具は、株式会社コトブキから寄附されている。)

スタジオでは、松下電器産業から寄附された、50インチのインタラクティブプラズマディスプレイとデジタルビデオカメラ、レノボ・ジャパン株式会社より寄附されたタブレットPC

を利用することができる。これにより、コンテンツ制作の授業や、タブレットPCを用いたワークショップなどを行うことができる。



福武ラーニングシアターおよび福武ラーニングスタジオの運営サポートは、併設される福武ラーニングラボで行う予定である。また、福武ラーニングラボでは、情報学環 ベネッセ先端教育技術学講座および大学総合教育研究センター マイクロソフト先進教育環境寄附研究部門が情報通信技術を用いた新しい教育システムを研究開発し、福武ラーニングシアター、福武ラーニングスタジオを用いて実証実験を行うことになっている。(大学院情報学環 助教授 山内祐平)



情報学環・福武ホール 概要

施設概要

- 場 所: 赤門横・史料編纂所前
- 規 模: 地上2階、
地下2階 延べ床面積404729m²
- 建設費: 15億円
- 設 計: 安藤忠雄建築研究所

施設内容

- 地上2F: 教員研究室・資料室
- 地上1F: カフェ・学環コモンズ (スタッフスペース、ミーティングスペース、プロジェクトスペース、ラウンジスペースなど)
- 地下1F: 全学共同利用スペース (史料編纂所・情報基盤センター)
- 地下2F: 福武ラーニングシアター
最先端のIT設備を備え、国際遠隔授業やシンポジウムなどに利用できる定員180名の大教室
福武ラーニングスタジオ
家具やIT機器を自由に組み合わせて利用できる、定員16名の協同学習・ワークショップ用のスタジオ教室 (3室)
福武ラーニングラボ
寄附講座など、産学連携による最先端の研究を展開するスペース
ホワイエ兼パーティスペース
福武ラーニングシアター脇にあるホワイエは、国際会議などの後に開かれるパーティスペースとしても利用できるように設計されている

